

- ★ 発行 50 号までを振りかえって
- ★ 夏休み子ども体験学習
- ★ 感染症発生動向調査について

発行 50 号までを振りかえって

堺市衛生研究所発行の「衛研だより」は平成 13 年に第 1 号を発行して以来、本号で第 50 号となりました。

平成 12 年 7 月に市内の大病院で発生したセラチアによる院内感染事例で 8 名の患者さんの尊い命が奪われました。この事例で衛生研究所は全力投球で原因究明にあたり、院内感染終息に寄与することが出来ました。その事例対応から、市民の皆様へ安全・安心情報を発信しなければならないとの認識のもと、一つの手段として年 4 回の「衛研だより」の発行を企画いたしました。

翌 13 年にはウイルス検査が立ち上がり、感染症検査の体制は整いました。しかし、近隣の衛生研究所に比べてハード面、ソフト面での力不足は否めず、これを契機に、食中毒、細菌やウイルス感染症、化学物質による健康被害の原因究明だけでなく、当研究所の果たすべき役割を認識し「追いつけ追い越せ」を心に秘めて努力してまいりました。

平成 18 年には政令指定都市に移行しましたが、同年にノロウイルス大流行があり、当研究所が本邦で初めて開発したノロウイルス迅速診断試薬を用いて、老人福祉施設を含む各施設や医療機関でのノロウイルス感染拡大防止に貢献いたしました。

今回、記念の 50 号を発行するにあたり、平成 12 年から、各検査分野で取り組んだ成果の一部をご紹介します。いかにして前向きに堺市民の皆様へ安全・安心への情報を提供する事が出来るか、皆様からのご意見と共に追い越すエネルギーとご指導を賜りたく思っています。

(所長 田中)

細菌検査担当:

本市における大きな健康危機事例として、平成 13 年にアメリカで発生した炭疽菌によるバイオテロ事件を模倣した、いわゆる「白い粉」事件がありました。高度安全検査室内での対処が必須であり、細菌検査担当を中心として研究所全体の危機対応事例となりました。平成 14 年には病院内保育所での腸管出血性大腸菌 O26 集団発生、平成 18 年には市内保育施設での ESBL 産生性細菌性赤痢集団発生、平成 20 年には国内発生 2 例目となるコレラ毒素産生性 *Vibrio cholerae* O139 感染症事例、平成 23 年の患者数 1,000 名を超えるウェルシュ菌による集団食中毒事例などがありました。いずれの事例も保健所等と協働して迅速に対応し病因物質や感染源の解明に取り組んできました。これからもすべての細菌感染症について、危機意識の



衛生研究所外観(昭和 40 年建築)
(衛研だより創刊号掲載)

向上、迅速な検査診断、関係部署との連携を周知徹底し対応する所存です。

(細菌検査担当 杉本)

ウイルス検査担当:

当所では性感染症検査と医動物（衛生害虫や寄生虫）の検査を行っていましたが、平成 13 年、新たにウイルス検査が開始されました。そして今日まで、専門学会、研究会等で研鑽しつつ、様々なウイルス感染症に対応できる検査診断技術の向上に努めてきました。平成 18 年のノロウイルス大流行、平成 21 年の新型インフルエンザ・パンデミック発生、24-25 年にかけての風しん流行には迅速かつ的確な診断を市内医療機関に提供し流行の拡大防止に寄与しました。H7N9 インフルエンザや、直近の重症熱性血小板減少症候群（SFTS）のような新たなウイルス検査は民間検査所では取り扱うことが出来ず、当所のウイルス感染症検査診断の責務が極めて大きい存在となっています。これからも「衛研だより」を通して、ウイルス感染症検査診断や予防などの情報を提供し市民の皆様の健康に貢献していきます。（ウイルス検査担当 内野）

環境検査担当:

人と環境の付き合いは古代から続いています。堺市と環境の付き合いについて、環境部門では、「堺・水物語」をとり上げ、明治～大正～昭和にかけての堺の井戸水、水道の変遷、そして「しほゆあみ」の歴史について紹介しました。続いて「環境基礎講座」では、大和川、石津の風車、茶の湯、浜寺公園、仁徳陵古墳など、今に誇れる古き良き堺の伝統文化と環境とのかかわりに焦点をあてて連載しました。環境部門の健康危機は、はっきり目に見えない事象から突然発生するのが特徴です。平成 13 年に、市内の廃業メッキ工場跡に毒物



旧天王貯水池正面入口（中三国ヶ丘町）
（衛研だより第 9 号掲載）



浜寺公園と水路（衛研だより第 22 号掲載）

であるシアンが含まれている廃液が放置されていました。取り扱いを誤れば猛毒シアンガス発生の危険性と共に水路、河川などの水系汚染による極めて重大な生命の危機を招く事件でありました。当所では直ちに無毒化のための処理方法の情報を提供し事なきを得ました。水質に関する情報収集と共に水質調査が重要な課題であり、今後も安全性の確認に日々取り組んでいきます。（理化学検査担当 田畑）

食品検査担当:

この 10 年間、食の安全・安心に対する信頼を揺るがせる事例が相次いで起こりました。特に平成 19 年年末に発生したメタミドホス混入中国製冷凍ギョウザによる食中毒事件は日本中を震撼させました。厚生労働省の調査では、全国で合計 10 名、うち 1 名が重篤、4 名が重症の食中毒事例でした。当所でも本市内に流通する冷凍食品の緊急検査を行いました。平成 20 年、苦味の苦情で回収した味付けのりの確認検査の結果、同製品全てからチアベンダゾールが検出されました。味付け工程で調味液を塗布する機械で使用するスポンジロールに抗菌目的で使用

されていたチアベンダゾールが移行したことを究明しました。当所では、食品中に含まれる残留農薬等は頻繁に検査していますが、食品に使用する器具汚染は想定外でした。この事例から、画一的な検査ではなく多様な検査の重要性を再認識しました。今後の食の安全・安心検査の実施には、応用力を培わねば市民の皆様様に自信を持って安全を提供出来ないと考えています。

(理化学検査担当 神藤)

感染症情報センター担当:

当研究所が行っている感染症の検査や感染症疫学調査は感染症法に則っており、その感染症法に基づいて堺市感染症発生動向調査事業実施要綱が制定されました。その実施要綱により堺市感染症情報センターが当研究所内に設置されています。

基幹定点 2 病院を含む市内の 41 定点医療機関から感染症に係る情報を毎月曜日に収集し、大阪府・大阪市・堺市・東大阪市・高槻市・豊中市からなる感染症発生動向調査解析評価小委員会で毎水曜日に解析が行なわれています。得られた感染症に関する情報は詳細に分析され、結果を市内の全ての医療機関等に提供しています。感染症に対する健康危機管理体制を整え、健康で安心できる生活環境を守っていくためです。

週毎の情報還元とともに、この「衛研だより」でもお知らせしている感染症の発生動向が、市民の皆様様の健康維持に少しでもお役に立てればと思っています。(企画調整担当 沼田)

夏休み子ども体験学習

小学 5、6 年生を対象として開催している「夏休み子ども体験学習」を、今年 8 月 9 日に「手洗いの科学」をテーマに実施しました。

まず、子ども達に手の役目について考えてもらった後、3 つの方法で手の汚れについて実験しました。最初は手のひらのスタンプで、専用の寒天培地に手を押しつけて培養し、どれだけ細菌が手についていたかを調べました。手洗い前後で比較し、結果を後日写真(右写真)で送りました。次に手の汚れを ATP チェッカーという機械を使って数値で表しました。手洗い前の高い数値が手洗い後には小さくなっていることを見て、安心していました。3 つ目は蛍光物質の入ったローションを汚れに見立てて手に塗りこみ、手洗い後、ブラックライトを当てどの部分が洗い残された汚れとして光っているか観察しました。最後は先生から



手洗い前の右手



体験学習に参加したみなさん

教わった正しい手洗い方法で丁寧に手を洗いました。手洗いについてしっかり学んだ後、実際に細菌がどんな形をしているのか、ヨーグルトと納豆の中の細菌を顕微鏡で観察し、スケッチしました。

3 つの実験から手にはたくさんの細菌がついていることを学びました。そのため手洗いの大切さと正しい手洗い方法を学びました。体験学習の様子は当研究所のホームページにも載せています。

(<http://www.city.sakai.lg.jp/kenko/kenko/hokencenter/eiken/index.html>) (細菌検査担当 福田)

感染症発生動向調査について

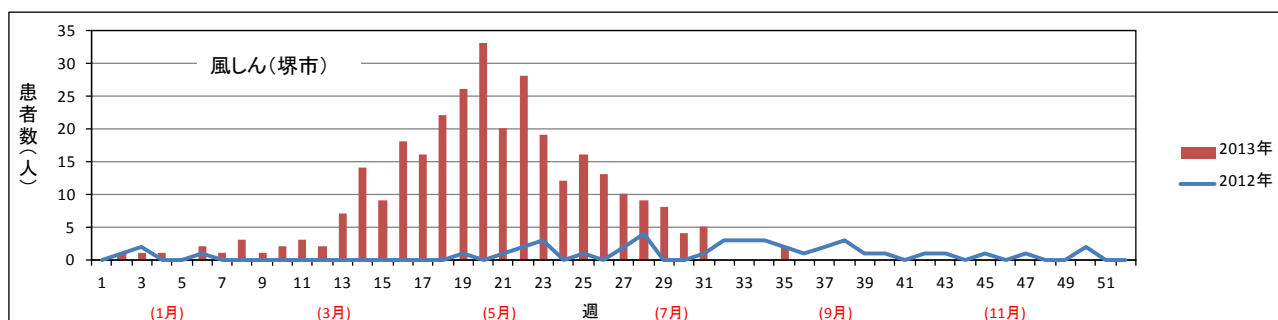
本市での風しん患者数は、昨年の44名と比べ、今年は8月末現在で307名と昨年の7倍の報告数となっています。第20週(5月)の33名をピークとする大きな流行となりました。当市は緊急対策として風しん予防接種費用の一部助成も開始しました。8月に入り、患者届出数も数例となり風しんの流行が収まりつつあります。

今シーズンの手足口病は、過去5年間では平成23年に次ぐ大流行となりました。第31週(7/29～8/4)に定点あたり6.21と本年の最高値を示し、3週連続で警報レベルの5を超えました。原因ウイルスとして、A群コクサッキーウイルス6型、エンテロウイルス71型が検出されました。ヘルパンギーナは第31週に定点あたり4.05のピークを迎えた後、減少に向かいました。

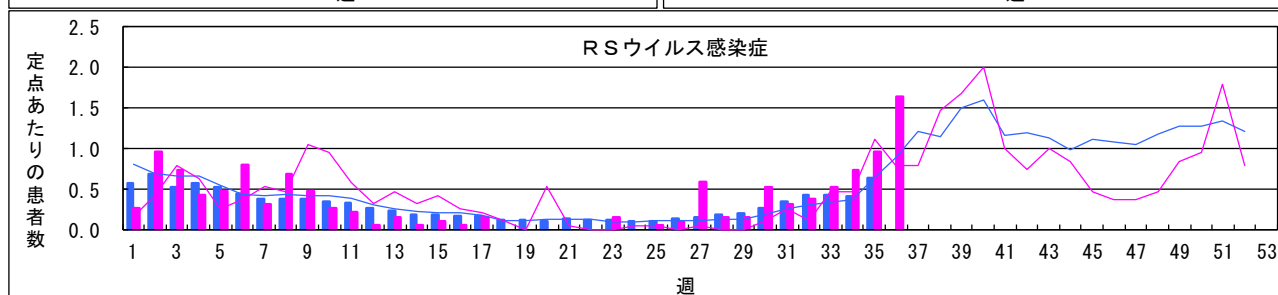
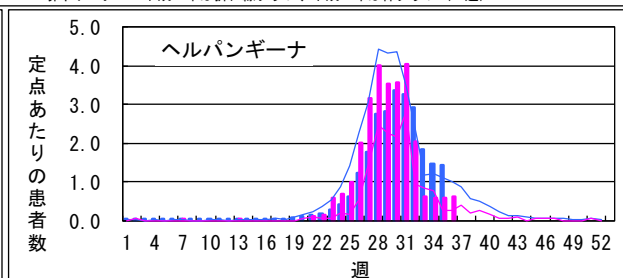
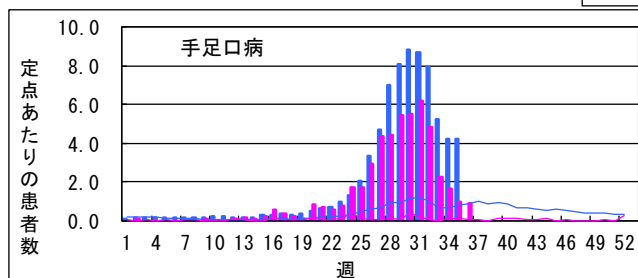
夏型感染症は終息に向かっています。

RSウイルス感染症が増加傾向を示しています。全国的にも第25週以降増加が続いています。この感染症は1度かかっても十分な免疫が得られず、何度もかかることがあります。6ヶ月以下の赤ちゃんがかかると、肺炎などで入院が必要となることもありますので、飛沫感染を防ぐためマスクを着用して0歳児、1歳児に接することが大切です。

(企画調整担当 沼田)



— 全国データ : 平成24年は折れ線グラフ、平成25年は棒グラフ (35週)
— 堺市データ : 平成24年は折れ線グラフ、平成25年は棒グラフ (36週)



発行者	堺市衛生研究所長 田中智之	〒590-0953	大阪府堺市堺区甲斐町東3-2-8
編集委員長	瀬尾 宗治	TEL 072(238)1848	FAX 072(227)9991
編集副委員長	三好 龍也	E-mail eiken@earth.ocn.ne.jp	

「衛研だより」では、みなさまのご意見、ご感想をお待ちしております。